みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

日本人のアンデス先史学45年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大貫, 良夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001656

関　雄二・木村秀雄編『歴史の山脈――日本人によるアンデス研究の回顧と展望――』
国立民族学博物館調査報告　55:15-27(2005)

日本人のアンデス先史学45年

大貫　良夫
野外民族博物館リトルワールド

1. はじめに
2. コトシュの発掘
3. 1966・69年の一般調査
4. カハマルカでの発掘成果　1979-89
5. クントゥル・ワシ神殿の修復保存事業
6. 終わりに

1. はじめに

このたびのシンポジウムは藤井龍彦教授の退官を記念しての開催である。古くからの研究仲間のひとりとして，まずは藤井さんに長い間ご苦労さまでしたとご挨拶申し上げたい。

本日の話者としての私に与えられた課題は，日本人によるアンデス先史学研究の概略を述べることであるが，学問的内容に即してではなく，むしろその周辺部分を強調するような形で述べよという要請があったので，その趣旨に添って話を進める。日本人研究者によるアンデス先史学の成果については，別の機会に紹介したことがあるので，内容と発表文献なども含めて，それを参照して頂きたい（加藤・関 1998; Onuki 2002)。そこでこれから申し上げる話の前半はそういうことにして，後半の方ではここ4年がかりで行ってきたクントゥル・ワシ遺跡の修復保存の仕事について披露する。

2. コトシュの発掘

日本人によるアンデス先史学研究は1958年の東京大学アンデス地帯学術調査団に始まる。そのいきさつはすでに多くが語られており，ここに述べるまでもないが，何といっても泉靖一先生の発想と実行力のおかげである。この調査団はアンデス文明の起源の解明を主たる課題として発足した。この少し前に江上波夫先生がイラン・イラク調査団を組織して，イラクで発掘を始めていた。それは，古代オリエント文明の起源を解明することを目的としており，アンデス研究はこれに呼応する形であった。事実，この二つの調査は，新旧両大陸文明起源の比較研究という，壮大な研究テーマを共有し，相互交流をして欧米研究者に負けない，またそれとはちがう新しい成果を生むことを目指していたのである。

1958年の調査はペルーを中心に，エクアドルからボリビア，チリ北部にまたがる広域一般調査で，300近い遺跡を探訪し，その過程で多くの知見を得ると共に，アンデスという土地に身体と精神を順応させることに成功した。また，現地の研究者たちとの交流を

確立したことも，後々のアンデス研究継続の上で大きな意義を持った。ルイス・E・バルカルセル，ホルヘ・C・ムエイェ，国立人類学考古学博物館のスタッフ，この中にはフーリオ・C・テーヨの直弟子たちが何人もいたが，こういう大御所たちが日本調査団を歓迎してくれた。さらに後年ペルーの考古学界で指導的役割を果たすルイス・ルンブレーラスやエルナン・アマット，ローサ・フンなどが学生ではあったが，調査団を助けてくれた。もちろん特筆すべきは天野芳太郎さんの存在である。また，戦時中過酷な経験をした日本人移住者の助力も忘れてはならない。

さて，1958年の一般調査の成果を踏まえて，泉先生は本格的な発掘の場所としてコトシュ遺跡を選定し，1960年に第1回目の発掘を実施する。このときペルーの経験者は泉先生の他には二人だけ，寺田和夫先生と地理学の佐藤久先生だった。寺田先生はしばらくコトシュにいた後はトゥンベスでの発掘に出かけ，佐藤先生は地理学の調査でこれもまたしばらくすると北の方へ調査に出発された。したがってコトシュの発掘に専念したのは泉先生を除けば，曾野寿彦先生，貞末堯司さん，私の3人，みんなペルーがはじめてで，スペイン語もにわか仕込み，片言ともいえないような有様で，不案内の極みであった。

このような日本の研究者を暖かく受け入れてくれたのがペルーという国であり，関係者の方々であった。1960年の調査が終わってから，リマのサン・マルコス大学で成果報告の講演会があった。泉先生が日本語で話し，日本大使館で通訳兼弁護士として働いていたドクトル岡本が通訳した。事前の打ち合わせが十分でなく，考古学用語の翻訳でしばしば寺田先生も介入して来るという講演会だった。しかし会場はいっぱいで，といっても何人くらいかよく覚えていないが，たぶん100人前後だっただろう，終わってからも活発な質疑応答がなされた。当時，ペルーではスライド現像ができず，コダクロームのフィルムはパナマまで郵送して現像していた。それでもそれが間に合ったのだろう。たしかスライドも上映したと思う。

コトシュの発掘は衝撃的な発見をもたらした。先土器時代の石造建築である神殿を見つけたのである。その意義については後にカウリケさんが述べることになっているので省略するが，このような成果を上げることができたのは，日本的な発掘方法とすぐれたチームワークだったと思う。発掘方法というのは日本においては特別のものではない。トレンチ（試掘溝）を入れて層位を調べ，様子を見て広げて面的に広い区域を発掘し，建築とその重なりを明らかにするというものである。もちろん厳密な層位確認と関連した遺物の採取も行う。これがペルー人研究者には珍しかったようだ。当時はいわゆるテレフォンブースに人工層位というたぐいの発掘をアメリカ人たちが行っており，それとの違いについて質問がいくつかあった。1メートル四方とか2メートル四方の発掘穴を掘って，層位は10センチあるいは20センチごとに水平に切って上から番号を振るもので，層の重なりが斜めになっていたらどうするのか，狭いテレフォンブースのごとき範囲を掘るだけでは建築の形，土層の流れなどがわからないではないかというのが，日本研究

者の思いだった。

コトシュの発掘でもう一つ重要な発見は，チャビン土器の包含層の下に，それより古い土器の時期が2つあるという事実だった。チャビン以前の土器の存在は確証がなく，石造神殿などはあるはずがないと考えられていた時代である。そこへチャビンより古い土器の時期が2つもあり，しかも芸術的なできばえの土器をすでに作っていた。その土器の一つの特徴が，焼き上げた後に顔料を塗布して色を付ける，いわゆるポストコクション式彩色装飾である。その年，調査が終わって北ペルーに曾野先生や貞末さんと旅行し，カハマルカで紹介された考古学愛好家のロドルフォ・ラビーネス氏に紹介された。そこで見せられたたくさんのカハマルカ地方出土の土器の中に，ポストコクションと刻線の土器があった。ラビーネス氏はそれらはタンボマーヨというところで見つけたものだと言った。以来，私の頭からタンボマーヨという地名の消えることがなかった。

1963年と66年のコトシュ発掘で，ワヌコ盆地の古期末期から形成期までの編年を確立することができ，先土器時代の神殿が少なくとも3回作り替えられていることもわかった。そしてコトシュには若い研究者たちが何人もやってきた。友枝啓泰さん，狩野千秋さん，松沢亜生さん，藤井龍彦さん，その他の面々である。また，ペルー人の学生も参加するようになり，私たち若者と友人になった。63年には，マリオ・ベナビーデス，エンリケ・ゴンサーレス，アウグスト・クルサット，66年にはロレンソ・サマニエゴ，アルトゥーロ・ルイス，後に友枝さんの奥さんになるカルメンさんなどが来た。66年の調査では増田昭三先生もワヌコに滞在された。また人類学の近藤四郎先生と原子令三さんが来て，友枝さんのフィールドであるアヤクチョ地方の調査に出かけたし，地理学では佐藤・岩塚守公・田嶋久さんたちに加えて野上道男さんもペルーに来た。こうしてみると，1960年代後半になって，日本人のアンデス研究は先史学，地理学，植物学，民族学そしてエスノヒストリーなど，いくつもの分野でそれぞれ独自の調査や研究が行われるようになったといる。また京都大学農学部の人たちもペルーからボリビアにかけて独自の植物調査を行なっており，そのとき山本紀夫さんがペルーの土を踏んでいる。京都大学といえば1963年頃吉田集而さんがプーノ地方にいたのだが，会えずじまいで，その後吉田さんはオセアニアの方へフィールドを変えたので，アンデス研究では一緒になることがなかった。こうした専門分野への分岐とその後の発展については別の方々の話に譲る。

コトシュの成果についてもうひとつ書き添えておきたいことがある。それは神殿の意義についてである。交差した手の神殿その他の先土器時代ミト期の神殿を発掘したのち，泉先生は文明形成のプロセスにおいては，「はじめに神殿ありき」であるという考えを発表なさった（泉 1966）。

当時はゴードン・チャイルドのメソポタミア文明の起源論が強い影響力を持っていたし，文化進化の理論的影響もまだかなり強く，とくに先史学の分野で残っていた。それらの理論によれば，農業生産が進んで食料に余剰ができて，その余剰によって食料生産

に直接従事しない人々の生存が可能になり，この可能性によって政治・宗教・技術・商業・芸術などの諸分野の活動に専念する人が現れ，職業的専門分化が進み，やがて社会の階層分化も進み，神殿や宮殿などの公共建築も発達するという道筋が，文明の起源に関して広く受け入れられていた考えであった。

しかし，コトシュの神殿が先土器時代にあったとなると，この筋道は怪しくなる。少なくとも食料生産の軸としての農業はまだ十分な発達をしていないといわざるを得ない。そこで泉先生は神殿の方がその他の文明の要素に先行するという見方をいち早く披瀝されたわけである。そして神殿に物資や情報が集中する過程で社会が複雑化するという見通しを立てた。しかし，その複雑化の過程や神殿がその過程で果たした役割についてはまだ詳しい議論は生まれなかった。

もうひとつは，コトシュの神殿が少なくとも3つ重なっていたことを解明した意義についてである。これは日本の調査団が3回にわたって同じコトシュ遺跡を大規模にシステマティックに発掘した成果として，きわめて高く評価しなければならない。ほかの発掘との比較は今省略するが，その後コトシュと同じ時期の神殿発掘において，コトシュのような重なりを解明した例はほとんどない。そしてこの重なりについて，泉・松沢の両人が1967年に「神殿埋葬」という概念を打ち出したのである（泉・松沢 1967)。しかし，この用語のオリジナリティについて泉・松沢の名前が出ることがあまりないように思えるので，あえてこのことを述べておく。

そしてコトシュ以後，同時代の先土器時代の神殿もしくは公共建築がいくつも見つかってゆき，アンデス文明形成過程の研究が大きく進展したのである。

3. 1966・69年の一般調査

1966年のコトシュその他ワヌコ盆地の遺跡発掘の後，私は藤井さんと北ペルーの方へ遺跡探索に出かけた。いわゆる一般調査である。行った先で遺跡の情報を集め，目指す形成期とおぼしき遺跡に出かけて表面観察をし，特徴的な遺物が地表に落ちていればそれを拾うというものだ。ワラス，チャビン・デ・ワンタル，カハマルカなどを訪れ，ワマチューコからは東へマラニョン川の向こう側まで行き，ガソリン切れで立ち往生，その帰りは車のスプリングの板がつぎつぎと割れてゆくなど，波乱の多い旅行だった。カハマルカではラビーネス氏を引っ張り出してあのタンボマーヨがどこかと探したが，見つからなかった。1969年は再び藤井さんと組んで一般調査を行い，カイェホン・デ・ワイラスからコルディエラ・ブランカの東側，シワス，ポマバンバ，ピスコバンバまで行った（図1)。

この藤井さんとの一般調査は，その後のアンデス先史学研究にとって非常に大きな意味を持つことになったと，私は認識している。その意義を3点挙げる。

まず，見て回った北部高地では高い山の上なら遺跡はいくらでもあるが，形成期の遺跡はほとんどないという印象を持った。私はTossiの植生地図を持っていたのだと思う。一方，前川文夫先生は独自の植生ゾーン分類をしていた。両者をつきあわせ，そこへ私の経験を入れると，高地の遺跡の分布が集中し，かつ人間生活が色濃く営まれてきたのは，warm savannaゾーンにTossiのee-MBという区域を含めたゾーンとその上に位置するtemperate steppeゾーンであった。そして私の印象は，形成期遺跡はこのwarm savannaの方に多いというものだった。その後，プルガル・ビダル（Pulgar Vidal）の8区分法を知り，このwarm savannaが彼の言うユンガ地帯に重なることを見て，私の印象は間違いではなかったと思った。

いささか自慢めくが，このプルガル・ビダルの8区分法を積極的に採用した考古学研究では私は最も古い者の一人ではないかと思う。私は1978年にこの区分法を論文の中で採用した（大貫 1978; 1979）。アメリカなどの研究者の論文にユンガその他，プルガル・ビダル8区分法が出てくるのは80年代に入ってからのように思う。

閑話休題，こうして形成期遺跡の探索はまずユンガ地帯から始めることにした。このことが，のちにカハマルカでワカロマ遺跡との出会いへと導いてくれたと思う。そしてそここそがラビーネス氏のタンボマーヨ式土器を出す遺跡だったのである。

第2に，1969年にアンカシュ県のコルディエラ・ブランカの東側にあるシワスの町に行ったとき，小中学校で考古学の話をし，「上を向いて歩こう」という歌を生徒の前で歌えといわれた。そのあとで校長先生達が慰労をしてくれてお茶をご馳走になった。そしてラ・パンパの遺跡のことを教えられた。同名の村をはるか上から眺め，あんな谷底の方で，暑いし，乾燥が強いし，よくも人が暮らすなあと，藤井さんと感心した，その村のことだった。半信半疑でそこまで車で降りて行き，大きな形成期の遺跡，しかもチャビン様式の土器やU字神殿，方形半地下式広場，石彫を伴う遺跡の存在を確認したのである。まさにそこはユンガ地帯だった。こうしてユンガ伝統の考えを強くしたのだが，その年，私たちはこのラ・パンパにトレンチを入れ，チャビン様式の土器その他を掘り出した。

第3の意義はラ・パンパの第2回目の発掘である。1970年に泉先生が亡くなられ，1975年から寺田先生がアンデス先史学調査を率いるようになった。そのときに選んだ遺跡はラ・パンパだった。その前年に相談を受けて私が遺跡まで案内をした。そして1975年，加藤泰建さん，丑野毅さんが新たに研究仲間に加わった。藤井さんと友枝さんがこの発掘に先輩役として参加し，私は最後の1ヶ月に加わった。ラ・パンパはさらにもう一度発掘すべきだと思ったが，村の居住環境が寺田先生には耐えられなかったようで，続行には“desanimado”（気力，やる気がないことを意味するスペイン語）という感じだったので，それではカハマルカで例のタンボマーヨ土器を出す遺跡を見つけて掘ろうということになった。はじめの5，6年間のクントゥル・ワシ村に比べれば，ラ・パンパの方が住みやすかったと思うのだが，寺田先生の性には合わなかったようだ。しかしそのおかげ

でカハマルカに転じてワカロマ遺跡やライソン遺跡その他の大発見に至り，やがてカハマルカでの知見と経験がクントゥル・ワシの発掘を可能にしたのだから，面白いものである。

4. カハマルカでの発掘成果　1979-89

カハマルカ盆地における形成期研究は1979年のワカロマ遺跡の発掘から始まった。そして82年にワカロマとライソン，ワイラポンゴ，ワカリス，アモシュルカ，コルギティンの発掘と手を広げ，それからワカロマの集中調査を重ねた。コルギティンについてはもう一度発掘が行われた。

これらの遺跡の発掘と遺物の分析から得られた成果はたくさんあり，それを基にした研究成果はまだこれからもたくさん出てきてしかるべきものと思うが，ここでは主なものをあげておく。

まず土器を伴う形成期について非常にしっかりとした編年体系を作ったことがあげられる。そして形成期だけでなくその後の長いカハマルカ文化の時代を含むインカ期までの編年を作った。これは当分の間，カハマルカ盆地の形成期とそれ以後の先史時代の参照軸として重要な働きをすると思う。

後期ワカロマ期の土器はとくに興味深いものだった。1960年に初めて見て，66年69年に藤井さんと足を運んで，さんざん探したあの幻の土器タンボマーヨそのものだったからだ。ラビーネスさんの案内でエンカニャーダの方を歩き，カヤックポーマの岩山をよじ登ったりしても見つからなかったのに，なんと今日ではカハマルカの市街地の一画にまでなってしまったワカロマにそれはたくさんあった。ワカロマの発掘のあと，私はラビーネスさんを訪ね，あのタンボマーヨ土器はワカロマで見つけたよと言うと，ラビーネスさんは「そうだよ，私もあそこで見つけたんだ」と言うではないか。世の中には奇人変人がいるものだ。

形成期については前期ワカロマ期，後期ワカロマ期，EL期，ライソン期という細分した編年体系を確立し，各時期の特徴を具体的に遺物と建築の面で明らかにした。また，ライソン文化という新しい文化の存在，それがカハマルカ盆地に本格的なリャマの飼育を持ち込んだ文化であることを明らかにしたことも，大きな成果である。その後ライソン文化はクントゥル・ワシ地域でも文化変化に大きな役割を果たしたことがわかったし，さらに興味深いことにモチェ谷の下流域にまで進出していたことがわかった。ライソン文化とはどこから来てどこへ消えたのか，形成期を終わらせ次の時代への橋渡しをしたのかどうか，いろいろな問題がライソン文化と共に出てくる。今後の調査と研究に大きな期待を寄せている。

ライソン遺跡の発掘も大きな成果を生んだ。加藤さんと関さんが担当した大発掘だっ

たが，ここでは岩盤を大規模に整形してテラスや階段を作り，神殿を載せた後期ワカロマ期と，それを壊して切石の神殿を築いたライソン期の2時期があったことがわかった。岩盤の基壇などまったく珍しいものだ。

ワカロマの発掘では後期ワカロマ期の神殿基壇が少なくとも3度作り替えられていたことがわかった。これも同じ遺跡に大規模な発掘をくり返したからこそ解明できた事実である。そしてこの事実から私はコトシュ神殿以来の宿題にある種の回答を得たように思ったものだった。それが神殿更新という古い慣習である。神殿埋葬ではなく，神殿更新なのではないかという考えである（大貫 1991；Onuki 1993；加藤・関 1998）。

こうした成果を踏まえて，1985年にカハマルカ盆地から太平洋側へ少し下ったところのセロ・ブランコの発掘を行った。そしてそれからセロ・ブランコの目と鼻の先にあるクントゥル・ワシの発掘へと進んだ次第である。

5. クントゥル・ワシ神殿の修復保存事業

クントゥル・ワシにおける発掘の成果はここでは触れない。また，その理論的な成果についても日本語の本にまとめられているのでそれを参照願いたい（加藤・関 1998）。発掘によって精巧なできばえの金製品を伴う墓が見つかったこと，それが契機でクントゥル・ワシ村に博物館を建設したこと，これら一連の出来事についても経過は本にまとめた（大貫 1998）。

こうして，クントゥル・ワシでは地元に博物館を建設し，これまで村人に運営をゆだねてきた。その人たちの運営能力は徐々に高まっている。そしてさらにクントゥル・ワシの建築の一部を表に出して，目に見える形で保存し，啓蒙と地域振興に役立てる計画が持ち上がった。幸い，日本のユネスコ信託基金の利用が認められたので，2000年から2003年にかけて修復保存事業を実施した。いずれきちんとした経過報告と問題点，今後の展望などを盛り込んだ報告をまとめなければならないが，以下，その概要をかいつまんで紹介する。

クントゥル・ワシは形成期の石造神殿遺跡として，ペルーの北部高地ではチャビン・デ・ワンタルに次いで昔から名前が知られていた。その大規模にして組織的発掘という点では，チャビン・デ・ワンタルの発掘を凌いでいる。その成果を博物館の展示遺物だけでなく，遺跡そのものからも見てもらいたいというのが，私ども調査に携わった研究者の切なる思いでもある。遺跡の保存，発掘成果の展示，啓蒙，観光振興など，じつに多様な目的を達成するためにクントゥル・ワシ遺跡の復元と保存の事業をするわけである。

クントゥル・ワシでは4期の堆積が確認されたが，大きな神殿建築を建造したのは2番目の時期であるクントゥル・ワシ期で，それに続くコパ期がいくつかの改築を行ってい

た。尾根を幾段ものテラスに改造し，頂上部分に大石の壁をめぐらし，正面に中央階段を設け，それを上がった先の頂上部にU字神殿や円形広場その他を築いたのはクントゥル・ワシ期であった。コパ期は基本的にはこの形を継承し，またクントゥル・ワシ期の石彫の大部分も継承した。

したがって神殿の基礎を築いたクントゥル・ワシ期の建築を表に出してそれに保存措置を講じて野外展示としたく思ったが，発掘を進めるうちに正面壁や階段を除くと，U字基壇や中央広場もクントゥル・ワシ期のものはかなり壊されていたり，コパ期の建築の下に埋め込まれたりしていることがわかり，結局，クントゥル・ワシ期神殿の思想を継承しつつ改変を加えたコパ期の神殿の修復という結果になった（図2，3）。

また，正面の大きな壁を清掃し，壁石の修復をする過程で，二つの重要なことを発見した。ひとつは，中央階段に向かって右すなわち西側で，クントゥル・ワシ期の大石の土留め壁が前方に押し出されていて，修復は不可能と見たコパ期の人がそれを埋めて，その上に土留め壁を作り直していたことである。これは更新という習慣の問題ではなく，石壁が大規模に崩れた結果である。その原因についてはよくわからない。

もうひとつは頂上部ではほとんど跡形もなかったカハマルカ文化（主に前期と中期）が，正面壁を埋めた土の中に100基以上の墓を作っていたことだ。この正面壁は北東を向いており，朝日を受ける位置にある。カハマルカ盆地にあるベンタニーヤという，断崖に彫り込んだ墓も東向きの例が少なくとも2カ所あり，それとの関連もありそうで，大変興味深いことである。

さて，正面壁と中央階段の修復に加えて，頂上部のU字神殿も表に出すことにしたが，基壇の形を全部出すには，相当に時間をかけた発掘調査が終わらないとできないことがわかり，今回は中央広場だけの修復とした。この広場には各辺の中央に階段があり，それぞれが石彫を伴っている。そのうち2つが50年ほど以前に掘り出され動かされていたので，階段を復元し本来あった位置に石彫を置き直した（図4）。

広場の床下の全面的な発掘調査の後に，床の埋め直しを行い，ごくわずかな傾斜をつけて排水の工夫をした。排水についてはいくつかの工夫をしたがそれは別の機会に紹介したい。

こうしてあとは順路，ゴミ用の大瓶設置，案内パネルの設置を行い，ひとまず修復を終えた次第である。今後は，この遺跡管理や観光の基盤整備などをどうするのかという大問題が残っている。また，修復作業の経験の中で正真性とか修復技術とか考えさせられる問題に直面しつつも，同時に学ぶことも多く，たいへんエキサイティングな経験をしたと思っている。

厖大な遺物の分析，報告書のまとめ，その他クントゥル・ワシ調査の仕事は終わってはいない。しばらくすれば形成期研究の進展に合わせてクントゥル・ワシの再検討も必要になるだろう。

6. 終わりに

コトシュ，ワカロマ，クントゥル・ワシと続いてきたペルー北高地の形成期研究は，これから長い間，誰もが依拠する出発点であり続けると思う。そうした形成期研究に基づき編年表を作成すると，このようになる（図5）。これらのうち高地のほとんどは私たちの調査によるものだから，アンデス先史学への寄与がじつに大きいこと，それは一目瞭然である。またクントゥル・ワシの発掘に参加することにより，多くの若い人が育ってきた。そして今や，ペルーでは日本人研究者によるいくつもの先史学プロジェクトが実施されるようになった。関雄二のカハマルカ盆地と周辺の遺跡分布調査，井口欣也たちのワヌコ盆地サハラパタクの発掘，渡部森哉のタンタリカとサンタ・デリアという大遺跡の発掘，坂井正人のリモンカッロ発掘，鶴見英成のラス・ワカス発掘，芝田幸一郎のネペーニャ谷のセロ・ブランコ発掘など，大変な成果を上げている。そのほかカハマルカ以後，松本亮三たちのグループがチョンゴヤペやカイェホン・デ・ワイラスで発掘をしてきているし，土井正樹はアヤクチョ県で遺跡の発掘を開始した。またペルーではないが，大平秀一がエクアドルの山でインカ時代の大遺跡を発見し発掘をしている。これらはいずれも信頼度の高いデータを蓄積しつつあり，アンデス先史学への貢献は計り知れぬものがあると考える。

文　献

泉　靖一

1966　「はじめに神殿ありき」『朝日新聞』9月21日夕刊。

泉　靖一・松沢亜生

1967　「中央アンデスにおける無土器神殿文化――コトシュ・ミト期を中心にして」『ラテン・アメリカ研究』8: 39-69。ラテン・アメリカ協会。

加藤泰建・関　雄二編

1998　『文明の創造力』東京：角川書店。

大貫良夫

1978　「アンデス高地の環境利用―垂直統御をめぐる問題」『国立民族学博物館研究報告』3: 709-733。

1979　「ペルー南部民族学調査覚書」『リトルワールド年報』1: 1-17。

1991　「神殿更新」『読売新聞』6月10日夕刊。

1998　『アンデスの黄金』（中公新書）東京：中央公論新社。

Onuki, Yoshio

1993　Las actividades ceremoniales tempranas en la cuenca del alto Huallaga y algunos problemas generales. In L.Millones y Y. Onuki (eds.) *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies 37), pp.69-96.

2002　Japanese Research on Andean Prehistory. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 3, 57-78.

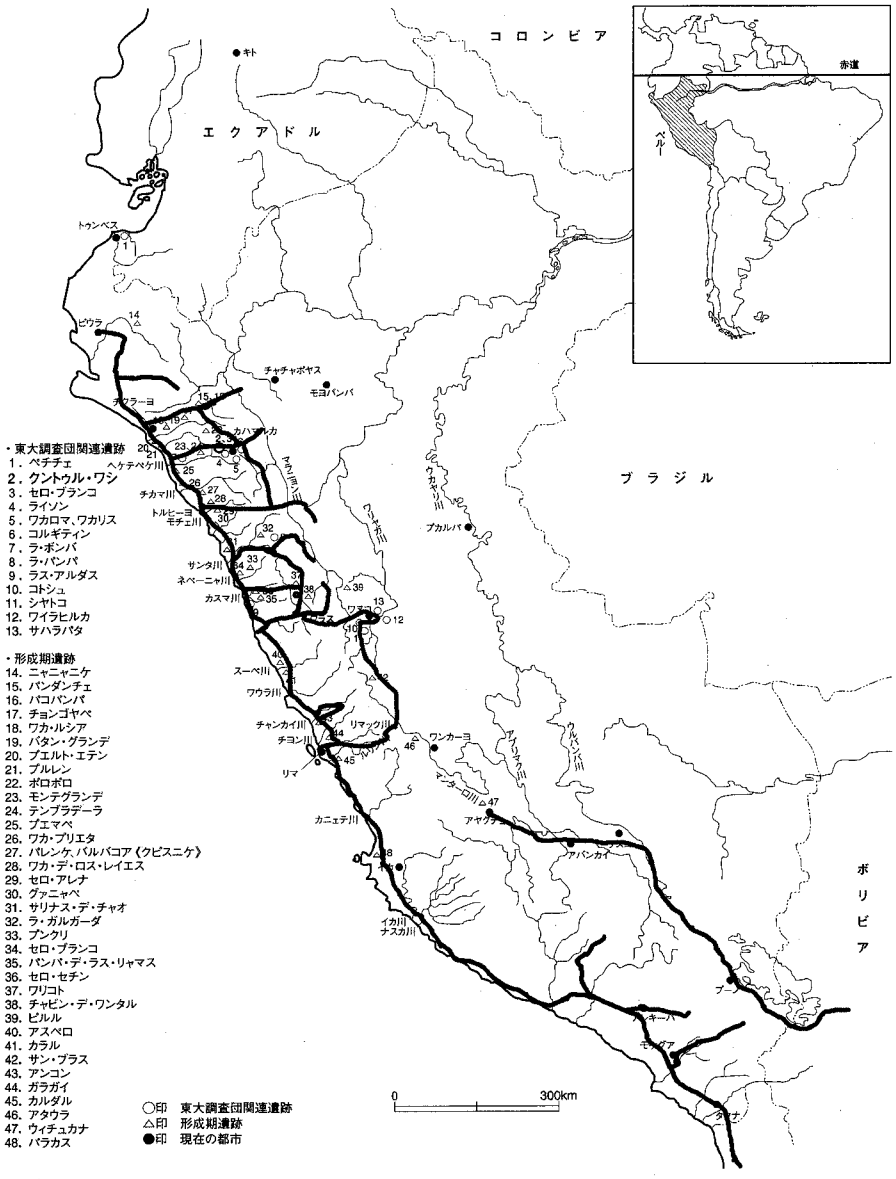


図1　藤井龍彦教授との一般調査ルート

図2　クントゥル・ワシ正面壁

図3　修復したクントゥル・ワシ正面壁と第1テラスの広場

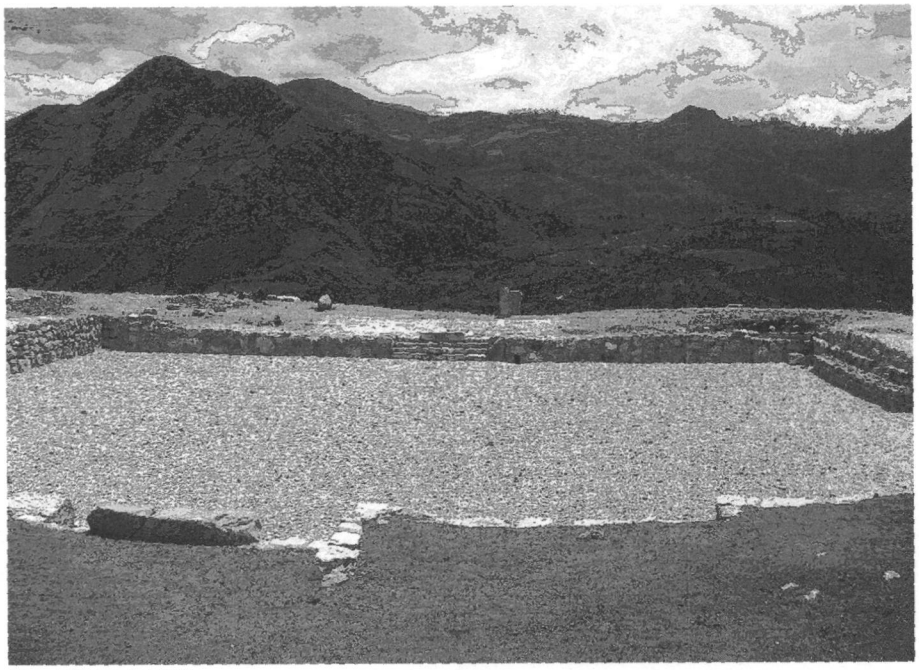
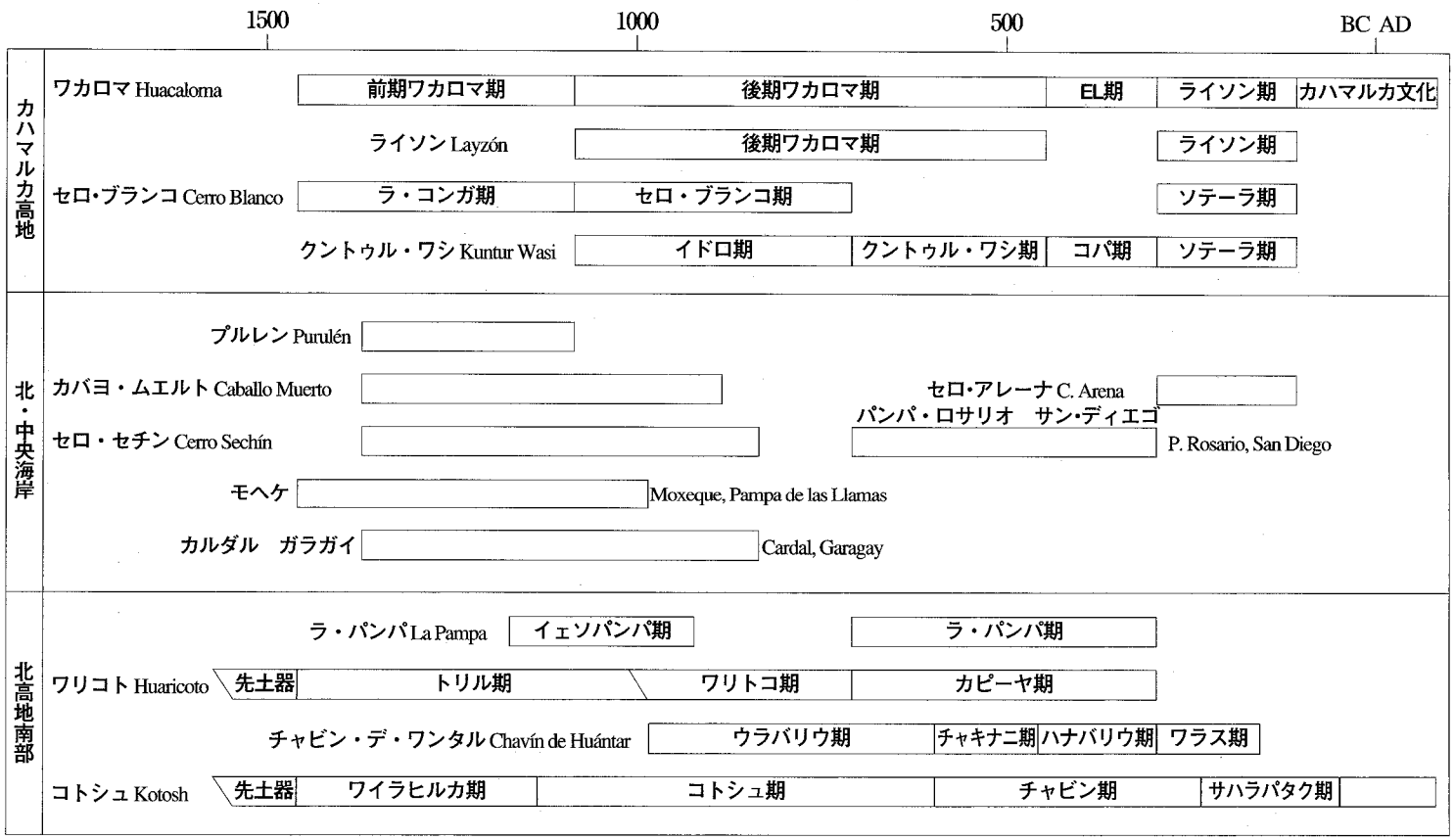


図4　修復後の中央広場



構成／東京大学アンデス文明調査団　大貫良夫

図5　アンデス文明形成期編年表